

愛護会・活動インタビュー

各水辺愛護会に、活動の合間を縫ってインタビューに応じていただきました。今回は、縄文の里水辺公園愛護会（下川口自治区）と、矢作自治区水辺愛護会（矢作自治区）の2つの愛護会へのインタビュー記事をお伝えします。活動に当たっての悩みや、今後の活動へのヒントなどを共有し、矢作川の素晴らしい水辺空間を、民官共働でつくっていきましょう。

聞き取り・文：豊田市矢作川研究所 吉橋久美子

矢作川河畔林整備事業

がわんま



第13号

平成29年7月



矢作自治区水辺愛護会（豊田市築平町） 聞き取り・平成28年7月26日



新貫鋭二さん（会長）（写真中央）
池野定雄さん（庶務会計）（写真左）
成瀬啓一さん（会員・矢作自治区区长）（写真右）
（肩書は当時）

「対岸からの眺めを良くする」ことを活動の目標とする愛護会のひとつである矢作自治区水辺愛護会。対岸の人との関わりや、川の姿の移り変わりについて話を伺いました。

活動をしてどんな成果がありましたか。

竹を伐って景観が良くなった。川が見えるようになった。また、以前は竹が道路の上にかぶさって、雪が降ると倒れてきて危なかった。竹が無くなると、道路に積もった雪もすぐに溶けて、安全に通れるようになったんだわ。

対岸の人との関わりは？

対岸の人たちも、自分たちの竹林を整備したのに、こっちが茂ると、こちら側を車で通る時にこちらが見えないということで、協力してくれる。わしらの農地はほとんど対岸だもんで、昔から仲良くしよったんだわ。

川の姿の移り変わりは？

昔はほんとに水がきれいだね、川に潜ると水族館みたいに遠くまで魚が見えた。アユやウナギなんかよく釣った。今は子供は川に行っちゃいかんと言われるが、ダムができて砂浜が無くなり、昔と川の様子が変わってしまったからね。でも、愛護会の活動が、少しでも「抑え」になり、川と接する機会を増やしていくきっかけになって行けばと思いますよ。

ご苦労や課題は？

活動場所がすごい急斜面で危険なんです。だから作業をお願いするのにも気が引けてしまう。また、だんだん高齢化して、「協力したくても体がいうことをきかんでできよった。」という人が多くなってきた。

澤田恵雄さん 縄文の里水辺公園愛護会会長（豊田市下川口町）
聞き取り・平成28年4月11日
（肩書は当時）



この地域に生まれた子たちが、ふるさとに帰ってくるようにするためにはどうしたらいいだろうと考えると、良い景観が一番だね。

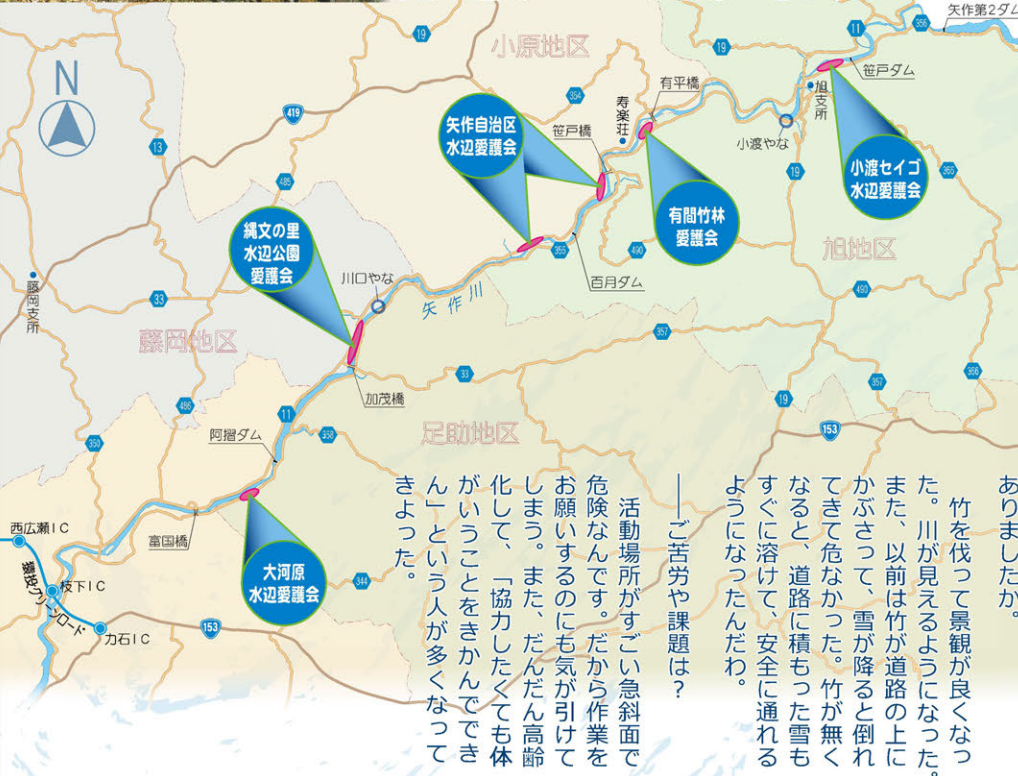
「こう語る縄文の里水辺公園愛護会の会長 澤田さんに、愛護会活動について話を伺いました。」

「苦労の中に価値が生まれる」

世の中結果主義で簡単なものをおりがたがるけど、手に入りにくいものに価値がある。愛護会活動ならば、作業の苦労の中に価値が生まれてくる。汗を流して手に入れた、前と全く違う風景に価値を感じるの、活動した人の特権だね。活動の大きな夢は、僕たちが子どもの頃に遊んだような環境をつくるってこと。昔は上級生が面倒を見て、川で泳ぎを教えてくれたりした。最近では子どもを川から遠ざけてしまいがちだが、川と接した思い出や景観を心に残すことが、地域と人とを結ぶ上で

「望んだイメージになっている」

いるんな人が、ここで車を停めてはのんびりしていくので、かなり望んだとおりのイメージになっている。今後は、ベンチやウッドデッキなんかを作って、そこでお弁当を食べただけだったらいいなと思う。後ろの山にも、この地域に合った木とか花とかをみんなで植えて、川も山も見てもらえるようになるよ。



愛護会・活動訪問記

愛護会の活動にお邪魔し、会の皆さんと活動を共にする当企画。
今回は、小渡セイゴ水辺愛護会（小渡自治区）、大河原水辺愛護会（大河原自治区）、有間竹林愛護会（笹戸自治区）への活動訪問記です。

小渡セイゴ水辺愛護会

訪問日：平成28年12月18日（肩書は当時）

霜が降りた12月の日曜日、小渡セイゴ水辺愛護会の活動日に訪問しました。

朝9時前、県道から川辺に至る活動地に向かいます。既に数人の会員の姿があり、川向うには小渡小学校が見えました。会員は徐々に集まり16人ほどになりました。鶴居利行会長からの挨拶の後、活動が始まります。

県道に沿った斜面の草刈りに数人、刈り払い機やチェーンソーで竹や木を伐る人、運ぶ人、燃やす人。竹は太いものも多く、長いと引きずるのに一苦労です。竹を運んでいると、吐く息は白いのに体がぼかぼかしてきました。1時間ほどが過ぎ、休憩に入りました。

小渡セイゴ水辺愛護会の48人は全員男性で、他の愛護会と比べ年齢層が若いのが特徴です。幾人かに話を伺いました。以前この竹やぶは換金できる材料としての竹、竹皮の産地だったそうです。ダムができる前は、川幅が広く、水量があり、魚がたくさんいる川であり、そして、この竹やぶと川辺は、加遊びや

ターザン遊びをする場所だったそうです。

休憩後、ふたたび草刈りや竹伐りが続けられ、すっきりとした空間が現れました。「一気に明るくなったね」という声とともに、イノシシを捕ったという会員からのしし鍋の振る舞いに、みなさんの談笑もはずんでいました。

活動訪問を終えて

これまでの活動によって、県道を覆っていた竹による冬季の道路の凍結はなくなり、対岸への眺め、対岸からの眺めも良くなりました。そして何より、小渡小学校の子どもたちが、最もその眺めの良さを享受し、心に刻んでいることでしょう。会員たちは子どもたちの存在を感じながら活動し、子どもたちは風景を守る大人たちの軌跡を見続け、感じる事ができるやりがいのある活動だと感じました。



大河原水辺愛護会

訪問日：平成29年5月14日（肩書は当時）

大河原水辺愛護会は2014年から活動を始め、今年で活動4年目に入りました。活動場所は、矢作川左岸に位置する豊田市大河原町の水辺です。天候に恵まれた5月の日曜日、愛護会の活動日に訪問しました。



朝8時、この日は会員24人中、17人が集合しました。活動地は既に伐り開かれているエリアと、「元気な竹林」を目指す間伐エリア、未整備エリアに分かれていると月山正己会長に説明を受けました。未整備エリアは川岸まで竹が密生し、光

も差さないような状態で、伐った竹を運び出すのも一苦労です。竹を伐る人、運び出す人、草を刈る人、伐った竹や木を燃やす人、それぞれが役割を分担し、散策路の整備を進めます。



作業の合間に一休み。伐った竹がペン手代わりです。会員のみなさんにお話を伺いました。昔は川の水も透明度が高く、5メートル先でも見えたこと。皆で魚をつかんで遊んだこと。町内に店が無かったため、小銭を持って対岸までアイスを買いに川を泳いで渡ったこと。驚いたことに、そんな思い出が、年配の方だけでなく、30代半ばの会員からも聞かれました。そして、かつてこの岸辺は、人が容易に入れる竹林であり、竹が売れなくなり、人の手が入らなくなったことで竹が密生してしまっただけでなく、上流側の愛護会と同じ悩みを抱えていました。

有間竹林愛護会

訪問日：平成28年3月13日（肩書は当時）

マダケと八千クが混在する竹林を活動地とする有間竹林愛護会。河畔の景観と遊歩道の整備により、住民や来町者に安らぎを与える癒しの場とすることを目的に、2011年より活動を開始しました。

良く晴れた日曜の8時半、わくわく事業で建設した「竹林ふれあいの小屋」に十数人の会員が集まりました。きれいに間伐され、遠くまで見通せる空間に、ウグイスの鳴き声が響いています。

今日の活動は竹の焼却です。山のように積んである竹を、焚き木にどんどんくべていきます。竹は勢いよく燃えて、パン！パン！と鉄砲のような音がこだまします。火の傍らにいる会員の顔は真っ赤。しばし手を休めておられる方たちにお話を伺いました。「家におるとだんだん世間が狭まっちゃった。みんなで何かやると」と、「対岸から見るときれいだよ。」みなさん活動の手ごたえをしっかりと感じておられるようです。

竹林を進むと未整備のエリアがあります。竹が立て込み、薄暗く、中に踏み込むこともできません。そこで、一人の女性が枯れた竹を道路わきに出す作



「黒い竹が汚いでしょう。きれいにしとんとイノシシも来る。夏は畑で忙しいで、冬のうちにちよっとずつね。」女性も頑張っているんですよ。タケノコを出荷したり、祭りで出店をしたり。地元で仲良く楽しく。」と、笑顔で教えて下さいました。愛護会の活動は人と人とのつながりを結びなおすことにもつながっているようです。

終了時刻が近くなると燃やした竹はすっかり灰に。原田茂男会長のご挨拶で活動は終了です。みなさんが整備した竹林にはこれから有間のみなさんが集い、おいしいタケノコが顔を出してくれ

お問い合わせ

豊田市 建設部 河川課
(矢作川研究所：川上、吉橋)
でんわ：0565-34-6860 / F A X：0565-34-6028
(管理担当：三輪田、近藤)
でんわ：0565-34-6672 / F A X：0565-33-2460

矢作川河畔林整備事業についてのご意見、ご感想等お気軽にご連絡ください。

◆カワセミはコバルトグリーンの美しい鳥で、川辺や石の上からダイビングして、水中の魚や水生昆虫をとらえます。

◆「かわせみ」は、豊田市が行う矢作川河畔林整備事業において、カワセミのように川に接する機会の多い地域の皆さまの視点でとらえた意見をお知らせするために発行しています。